

巻頭言

千葉大学総合情報処理センター長 土屋 俊*

「学術情報処理研究」は、主として日本の国立大学の総合情報処理センターで大学における学内共同利用情報処理施設の運用にたずさわっている研究者、技官その他が、情報処理技術の開発とその基礎的分野における研究、そして、みずからの関心による研究の成果を公刊し、意見を交流することを目的としている。総合情報処理センターは、現在、わが国の国立大学の約4分の1に設置されており、それぞれの学内において情報処理環境の構築と支援の重要な拠点となっており、教員、技官、事務官、そして予算ともに十分な基盤をもつものではないにもかかわらず、重要な役割を担っている。

大学における情報処理環境の構築と支援が現代の計算機技術、情報処理技術の進歩において核心的な機能をはたしてきたことは明らかである。とくに、ソフトウェアの開発およびソフトウェア開発の技術、技法に関する改良においてはその貢献が著しい。たとえば、現在の計算機ネットワークの利用においてもっとも一般的となった、情報サービス (information service) の分野においては、ftp や gopher のサーバプログラム、また、World Wide Web のさまざまなブラウザが北アメリカの大学の「センター」によって作られてきた。また、IBM の CMS にしても、インターネットにしても、UNIX にしても、大学のユーザの寄与なしには今日の隆盛は考えられず (CMS はもうあまり使われていないだろうが)、そのような大学からの寄与を可能にした一端は、各大学のセンターの努力であった。

もちろん、日本の大学内計算機センターと北アメリカのそれとを単純に比較することは危険であるが、しかし、日本の大学の「センター」がそれに匹敵する成果を挙げるといふ伝統はない。しかも、とかく過大な要求を出しがちなユーザ、高速大量の計算から簡便なメール環境にいたるあまりにも多様な需要、日米を問わず常態化した学術研究機関の予算不足、とかく技術の発達からテンポが遅れがちな学内事務機構など、その存立の基礎的要件はほとんど共通していると思われる。そして、このような要件こそはソフトウェアの進歩のための要件にほかならない。

それならば、この彼我の差の原因はどこにあるのだろうか。この原因の探究は、おそらく日本近代史の新たな側面を照らすことになるものであるかもしれない。すくなくともこの「巻頭言」で断定すべきことではないであろう。しかし、すくなくとも、その原因がどのように説明されることになろうとも、それによって宿命論的安堵を得てはいけないということは明らかである。日本にあるからどうせたいしたことはできないと諦めたり、大型計算機センターからだってたいしたもののはでて来ていないの (これは事実であろう) だからしょうがないと考えてはいけない。

そのような観点から、近年の学術及び総合情報処理センター研究交流・連絡会議で公式、非公式に話題となっていた気運を背景に、研究発表を中心とするものとして同会議を再編し、あわせて、本『学術情報処理研究』を創刊することによって、総合情報処理センターを中心とする研究活動、開発活動が一層促進されることを期待することとなった。この会議、雑誌は、総合情報処理センター職員が維持し、運営してゆく情報処理研究の最先端の内容になることが義務である。今後の発展を期待したい。

最後になってしまったが、たんに前例踏襲にとどまらず基本的な形を整えるというまさに産みの苦しみを担われた、愛媛大学、図書館情報大学総合情報処理センターのセンター長、専任教官、職員の皆さんをはじめとして、さまざまな形で協力して下さった皆さんにはとくに感謝したい。

*千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33, tutiya@chiba-u.ac.jp